

聖書：ピリピ 2：8～11

説教題：この方を高く上げて

日時：2017年1月1日（朝拝）

先週のクリスマス礼拝では2章6～8節を読みましたが、時間が限られていたこともあって、特にその前半部分に焦点を当て、後半は簡単に触れるにとどめました。今日はその残りの部分に触れながら11節までを見て行きたいと思います。さて6～8節はキリストのへりくだりについて述べている部分ですが、その部分はさらに二つに分けて考えることができます。6～7節前半はキリストの受肉について語られている部分です。神の御姿である方が、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿を取り、人間と同じようになられました。それに対して7節後半～8節では、人となられたキリストがどのようにご自身を低められのかが語られています。ですからここで話はさらに先へ進んでいるわけです。もう一度申し上げますと、6～7節前半は神が人となられたことにおけるへりくだりであり、7節後半～8節は人となられたキリストのさらなるへりくだりについて語っている部分となります。

まず8節に「ご自分を卑しくし」とあります。人間となったキリストはさらに卑しい立場にご自身を置かれました。それは誕生の仕方からそうでした。イエス様は立派な宮殿の中にはなく、飼葉おけの中に誕生されました。普通の人と同じような場所は備えられず、家畜のえさを入れる場所に寝かされました。その後まもなく、ヘロデ王に命を狙われてエジプトに逃亡しなければなりません。果たしてこれが神であるお方が人間となって誕生して過ごす環境でしょうか。その後、イエス様はガリラヤのナザレに行って住みました。貧しい夫婦のもと、30年間、両親に仕えて生活されました。そして公の生涯へ入られた後は多くの人々から挑戦を受け、誤解され、中傷され、拒絶されました。キリストはこのような低い立場をご自分から良しとして引き受けられました。この言葉を見ると「卑しくされ」とか「卑しめられ」と受身形では書かれていません。「自分を卑しくし」、すなわちご自分から自発的にこの道を選び取られたのです。そしてこれはその後続くことの準備となることでした。

それが「死にまでも従い、実に十字架の死にまでも従われました」ということです。十字架刑はご存知の通り、奴隷や極悪人に対して行なわれた当時の最も残酷な処刑方法でした。これはローマ市民権を持つ者には決して行なわれないものでした。この刑にか

けられる人は、自分で十字架を背負わされ、刑場までの道のりを歩いて行かなければなりません。そして十字架上で手足を縛られるか、木に直接くぎで打ちつけられるかして、息を引き取るまでそこに放置されました。今日は十字架の形をしたアクセサリーがあったり、教会堂の屋根に白い十字架がついているのを見慣れているために、当時の人々が十字架に抱いたであろう嫌悪感をなかなか理解できないかもしれません。そしてユダヤ人にとってみれば、申命記 21 章 23 節に「木につるされた者は、神に呪われた者だからである」とありますように、何と言っても神に呪われ、見捨てられた者の姿でした。考え得る最低最悪の状態でした。実に神であるキリストはそこまでも下って行かれたのです。神としての栄光ある立場を「わたしは捨てることができない」とは仰らず、私たちのような者を救うために、自発的に低くなり、どん底のどん底にまでくだって仕えてくださったのです。

しかし話はそこで終わりませんでした。このキリストのへりくだりに続いて 9～11 節にはキリストの高擧のことが語られます。9 節の最初に「それゆえ」とあります。すなわち 6～8 節で見たキリストのへりくだりがまず先にあって、これに基づいて 9 節以降のことがある！ということです。すなわち自分を低める者はそれで終わりではない。それゆえ！という言葉が後に続くのです。そして注目すべきはこの 9 節から主語が変わることです。これまでの 6～8 節の主語はキリストでした。ご自分を低くしたのはキリストでした。それに対して 9～11 節の主語は神にチェンジしています。つまり自分を低める者を神はどうされるかということがここに言われている。一番大切な神の最終判決、最終評価がここに示されているのです。

まず言われているのは、「それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。」ということです。キリストはこれ以上はない低きに下りました。しかし神はそのキリストを見捨てず、その生き方を高く評価されました。最後の十字架の死だけではありません。4 節以降で見て来ましたように、他の人のことを顧みるその生き方全体に対してです。他の人のことを思うがゆえに、自分の特権や立場も捨て、自分を低くしてへりくだって仕えたそのあり方に対してです。神はこのような歩みを非常に高く評価し、驚くべき大逆転を起こされるのです。すなわち人間の目では最悪の状態にまで落ちたキリストを、神は復活させ、高く上げて、すべての名に勝る名、いっさいのものに勝る名誉、権威を与えられたのです。マタイの福音書 28 章 18 節：「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。」 エペ

ソ書1章20～21節：「神は、その全能の力をキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。」

神がこのようにされた目的が以下に2つ述べられています。一つ目は10節にある通り、「それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ」ようになるということです。この「ひざをかがめる」という言葉は、イザヤ書45章の言葉を反映していると考えられます。イザヤ書45章22～24節：「地の果てのすべての者よ。わたしを仰ぎ見て救われよ。わたしが神である。ほかにはいない。わたしは自分にかけて誓った。わたしの口から出ることばは正しく、取り消すことはできない。すべてのひざはわたしに向かってかがみ、すべての舌は誓い、わたしについて、『ただ、主にだけ、正義と力がある』と言う。主に向かっていきり立つ者はみな、主のもとに来て恥じ入る。」ここにすべてのひざはイスラエルの神、主に対してかがめられるのであって、他に並ぶべき者はないと言われています。その排他的な神に対してだけささげられるべき誉れを、ペリピ書2章9節によれば、神はキリストに与えたということです。

もう一つ、11節には「すべての口が、『イエス・キリストは主である』と告白する」ためとあります。ひざをかがめるだけではなく、口で告白するようになる。イエス・キリストこそまことの主権者、まことの君である！と。興味深いのはここで「すべてがひざをかがめるとか「すべての口が告白する」と言われていることです。この「すべて」とは誰のことかと言えば、10節に「天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべて」とあります。これは信者も不信者も、また今生きている者もすでに死んだ者も、また天的な存在、すなわち御使いや悪霊たちも含む、あらゆる存在を表現しているものと思われます。それら一切がキリストの主権を認め、イエス・キリストこそ主であると告白するようになる。これはどういうことでしょうか。これはみなが最後にはキリストを信じるようになるということではありません。最後まで信じない人はいますし、また悪霊たちも最後の日まで敵対します。しかしついにはその反対者たちでさえ、キリストが主であることを認めざるを得ない状態にさせられるということです。大いなるショック、大いなる後悔とともに。先ほど参照したイザヤ書45章24節にも「主に向かっていきり立つ者はみな、主のもとに来て恥じ入る。」とありました。あるいはヨハネの

黙示録 1 章 7 節：「見よ。彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかり。アーメン。」  
こちらと同じく主に逆らい、主を受け入れなかった者たちが、主の再臨の日にはキリストが主であることを認めざるを得なくなり、自分たちが罪を悔い改めなかったことを嘆くというのです。このようにして最後の日にはすべてがひざをかがめ、すべての口がイエスこそ主であると認め、告白するようになるのです。

そして 11 節の最後に「父なる神がほめたたえられるため」とあります。キリストへの礼拝は神への礼拝と対立しません。キリストが礼拝されることによって父なる神がほめたたえられる。なぜかと言えば、キリストを世に遣わして救いのみわざを実現に至らしめたのは父なる神だからです。I コリント 15 章 23 節に、世界の歴史の最後にキリストがあらゆる支配とあらゆる権威、権力を滅ぼした後、国を父なる神にお渡しになると書かれていることも思い起こされます。神はキリストを主として立て、そのキリストが世の終わりまでこの世界と宇宙を支配されますが、それが完成に至ったあかつきにキリストは父なる神にこの国を返されるのです。

今日は新年 1 月 1 日。私たちはこの日、この箇所から何を学ぶことができるでしょうか。最後に 3 つのことを短く述べたいと思います。まずその一つは、この新しい年もイエス・キリストこそ、すべての上にありますまことの主、主の主であるということです。この世の多くの人はそのことを知らないでいるかもしれません。私たちはその周りの人々の考えに流されて、自分までこの聖書が述べる大事な真理を見失ってはなりません。この年を歩み出すにあたって私たちには色々な不安に思うことがあるかもしれません。世界情勢を見て、また自分の生活を見て、これからどうなることかと、ともすと思いやましいことが多々あるかもしれません。しかし私たちがこの日に思うべきは、この 2017 年の主はイエス・キリストであるということです。この 2017 年もこのお方が支配する年です。イエス・キリストこそまことの主です。ですから私たちはこの主権者を仰ぎ、この方に頼り、この方の御言葉に聞いて従って行けば良いのです。そこにこの年の私たちの真の祝福と幸いがあるのです。

二つ目は、私たちの毎週の礼拝はやがての大礼拝へとつながるものであるということです。ともするとクリスチャン人口の少ないこの日本で、私たちの礼拝はあまりにも小さな活動のように思われるかもしれません。世界の片隅でひっそり行なわれていること

のように思うかもしれませんが。しかしキリスト教は時代の中で負けて消滅していくということは決してない。むしろキリストの主権を告白する輪はいよいよ広がるのです。やがて世界中の人がそのことを認め、あらゆるひざがかがめられ、すべての口がキリストを主と告白して大合唱をささげる礼拝の日が来る。ヨハネの黙示録5章11～14節：「また私は見た。私は、御座と生き物と長老たちとの周りに、多くの御使いたちの声を聞いた。その数は万の幾万倍、千の幾千倍であった。彼らは大声で言った。『ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい神です。』またわたしは、天と地と、地の下と、海の上のあらゆる造られたもの、およびその中にある生き物がこう言うのを聞いた。『御座にすわる方と、小羊とに、賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。』また、四つの生き物はアーメンと言い、長老たちはひれ伏して拝んだ。」まさに天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてがひざをかがめてキリスト礼拝する光景です。このような日が必ず来るのです。その日へとつながっている礼拝を私たちはこの年も一週一週ささげて行きたいのです。これはやがての大礼拝の日を先取りし、その日が来ることを指し示す営みなのです。

そして三つ目は、このキリストの姿を見つめて私たちもへりくだりの歩みへ進みたいということです。キリストがこのように高い祝福の状態へ導かれたのは、まず自らを無にして仕える者としての歩みをささげたからです。パウロがこのキリストについて語って来た目的はまさにこのことでした。1～4節で見たように、ピリピ教会の中にはある種の不一致と争いがありました。そんな彼らにパウロは3節で「へりくだって互いに人を自分よりもすぐれた者と思うべきこと」、4節で「自分のことだけではなく、他の人のことも顧みるべきこと」を語りました。この歩みを励ますために、パウロはその後のことを書いて来たのです。ですから私たちはこのキリストの姿を見て励ましを受け、恐れることなく自らを低くする歩みへ進みたいと思います。キリストの姿に導かれて周りの人々に真に仕える歩みへ進みたいと思います。そのように歩む者を神は評価し、必ず高く引き上げてくださいます。そしてそのように歩むところにキリストの御国は広げられ、キリストをたたえる者たちの輪はいよいよ大きなものとなり、神に栄光が帰される歩みを私たちはささげて行くことができるのです。